

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

主 論 文 の 要 旨

論文題目

「正常」な身体のゲシュタルト崩壊——西洋視覚文化におけるボディ・イメージとその歪み——

氏 名 大木 龍之介

論 文 内 容 の 要 旨

本論文「「正常」な身体のゲシュタルト崩壊——西洋視覚文化におけるボディ・イメージとその歪み——」は、「正常」と呼ばれる身体への同一化や、「客観的」と言われる眼差しへの一体化が、いかに不可能なものでしかありえないのかを、西洋視覚文化におけるボディ・イメージとその病理——つまり、「ボディ・イメージの歪み (Body Image Disturbance)」に起因すると考えられる摂食障害や醜形恐怖症といった医学上の病——を描いた様々なテキストの分析を通じて、明らかにするものである。「正常」な身体や「客観的」な視点とは、それらを執拗に追求すればするほど、それらが根本的な不可能性を巡って構造化されていることが暴かれるものである。この構造をわたしは<「正常」な身体 of ゲシュタルト崩壊>と名づけた上で方法論的に採用し、西洋視覚文化における「正常」な身体がどのように語られ、描かれ、見せられてきたのかを執拗に追求することで、「正常」なものがいかに欲望に歪められた「正常」とは程遠いものでしかないのかを、精神分析とジェンダー論の立場から論証する。

これまでフェミニズム／ジェンダー論や精神医学の領域では、メディアが提示する身体像が個々人の精神と身体に及ぼす悪影響についての議論が重ねられてきた。多くのフェミニスト／ジェンダー論者らが論じてきた通り、メディアが描き出す身体のイメージは、規範的とされる身体の形状を定め、身体をどのように見るべきかという指標を提示することで、個々人の身体に対する劣等感を煽り、理想へと近づくためのダイエットやトレーニング、美容整形などを扇動する。そうした行為に執着する人々は、やがて摂食障害や醜形恐怖症へと陥り、精神的にも身体的にも不健康な状態へと追いやられてしまうのだ。摂食障害や醜形恐怖症の患者は、自らのボディ・イメージを必要以上に醜く捉えていることから、「ボディ・イメージの歪み」を抱えていると見なされる。このボディ・イメージの歪みは、摂食障害や醜形恐怖症を説明する際に視覚文化において頻繁に用いられるモチーフのひとつであり、そこでは鏡に映る「歪められた」イメージと、鏡の前に立つ人物の「実際の」

身体——それは過剰に痩せていたり、筋肉質であったりする——のイメージが提示される。ここでは、ボディ・イメージの歪みを抱える人々が、美を規定する支配的な文化基準にとらわれすぎたがゆえに、自らの身体を「正常」に、「客観的」に見ることができなくなっており、身体上の欠陥を矯正するために過度なダイエット、美容整形やトレーニングに没頭し、苦しんでいるのだ、というナラティブが形成される。また同時に、ボディ・イメージの歪みを持つ人々が執着する鏡像が「偽物」として、そしてわれわれ観客が見る、鏡の前に立つ彼／女らの身体が「本物」として位置づけられる。さらに彼／女らが自らの身体を見る様式は、彼／女らが鏡像を「誤って」認識しているという意味で「異常」なものとして病理化され、同時に鏡の前に立つ彼／女の身体を眺めるわれわれ観客の眼差しが、「正常」なものに位置に割り振られる。そして彼／女らが病的で「異常」な状態から抜け出すには、彼／女らは鏡像が「偽物」であることを受け入れ、われわれ観客のような「正常」で「客観的」な眼差しから自分自身の「本物」の身体を眺めなければならない。ボディ・イメージの歪みを可視化する視覚的イメージは、身体の見方における「正常／異常」モデルとでも呼べる二項対立的ナラティブを、観る側に提示するのである。

しかし精神分析的に言えば、自らの身体を「正常」で「客観的」な視点から見るとは不可能である。ジャック・ラカンによれば、鏡に映る統一されたイメージ（ゲシュタルト）を、〈他者〉によってそれが自身のものであることを承認された幼児は、鏡像に同一化することで、〈わたし〉という自己を形成していく。しかし主体を形成する鏡像は左右反転しており、主体にとっての〈わたし〉と「客観的」な〈他者〉にとっての主体が一致することはない。主体が「客観的」に自らの身体を見ることは、根本的に不可能なのだ。〈わたし〉と〈他者〉の間のこの「ずれ」は、主体に「〈他者〉と同じように〈わたし〉を眼差したい」という欲望を抱かせることになる。しかしわれわれは眼差し自体を見ることはできないため、「客観的」な〈他者〉の眼差しを追い求めようとすればするほど、それは消えゆく点となり、主体はいつまでも〈他者〉の眼差しによる承認を得られない。この意味で「客観的」な〈他者〉は、つねにすでに欠如しているのである。このことは主体を、鏡像段階以前に存在したと遡及的に想像される、「ばらばらに寸断された身体像」という死を想起させるおぞましい状態へと押し戻す。そこで主体は、自らの存在に必要不可欠な〈他者〉が根本的には不在なのだという「現実」から目を背けるために、〈他者〉の欠如を他の「なにか」によって、対象 *a* によって穴埋めしようとする。〈他者〉の眼差しも、対象 *a* に含まれるひとつだ。主体は自らの存在を支える〈他者〉の眼差しを、欲望の対象＝原因である対象 *a* として絶えず欲望することになるのだが、対象 *a* は象徴的秩序の内部で、欲望に支えられ、貫かれ、「歪められ」たものとしてのみ具現化される。「正常」で「客観的」な〈他者〉の眼差しは、「規範的＝正常」なものを定める美の基準を不可避的に伴う象徴的秩序に支えられ、貫かれ、「歪められ」た「なにか」としてしか、存在しえないのだ。

本論では、メディアが提示する理想的で規範的な身体のイメージを、根本的な不可能性を巡って構造化された〈他者〉の眼差しの、欲望に支えられ、貫かれ、「歪められ」た対象 *a* として、主体の「なることを通して手に入れる」欲望を喚起する、「正常」な身体として位置づける。精神分析において、主体に欲望することを可能にするのは「幻想」であり、ボディ・イメージもまたこの幻想と

して機能する。〈他者〉の眼差しと一体化するという欲望が、〈わたし〉と〈他者〉との間の「ずれ」によって喚起されるものであることを踏まえれば、「正常」な身体とは、〈わたし〉は〈他者〉にとって「正常」ではないのだ、「〈わたし〉は醜いのだ」というボディ・イメージ=幻想を通してはじめて欲望されるものだと言える。美の規範が織り込まれた象徴的秩序は、主体に自らのボディ・イメージを「醜い」と感じさせることで、〈わたし〉と〈他者〉とのものの見方の「ずれ」を意識させ、〈他者〉の眼差しにとって好ましく映る「正常」な身体を欲望させる。しかし審美的に「正常」とされる身体は、美の基準を定める〈他者〉が欠如しているという意味で、そしてその基準があまりにも高く設定され、また常に刷新されるという意味でも、到達不可能なものでしかありえない。そのため主体は、つねに〈他者〉の眼差しに好ましく映る身体を手に入れるという欲望を、断念せざるをえない。この欲望を妥協せず、〈他者〉の眼差しの具現化である「正常」な身体に近づこうとする人々は、やがて身体的にも精神的にも不健康な状態に陥ることとなり、「正常」とは程遠い「逸脱」した人物として、〈父の名〉によって病理化されることとなる。〈父の名〉の役割は、主体が〈他者〉の欠如という〈現実〉に近づき、欲望の先には死の欲動しかないという事実を暴き出すことを、すなわち享樂することを禁ずることにある。だとすれば、ボディ・イメージの歪みを抱えるとされる摂食障害や醜形恐怖症の人々は、〈他者〉の眼差しの具現化である「正常」な身体を執拗に追い求めた結果、〈他者〉が根本的な不可能性を巡って構造化されていること、そして「正常」な身体の前には身体と精神に悪影響を及ぼす死の欲動しかないこと、すなわち「正常」とは字義通りの「正常」とは程遠いものであることを、偶発的に露呈させており、ゆえに病理化されるのだと言えるはずだ。

「正常」なものを持続的に注視することは、「正常」とされるものの諸前提を疑問に付し、それが欲望に歪められた象徴的秩序によって作り上げられたものでしかないことを、浮き彫りにする——まるで漢字の「ゲシュタルト崩壊」のように。本論でわたしは、これを〈「正常」な身体のゲシュタルト崩壊〉と名づけた上で方法論的に採用し、「正常」な身体が、ダイエットが、トレーニングが、美容整形が、そしてボディ・イメージの歪みが、どのように表象されてきたのか、どのように「正常」が「醜い〈わたし〉」という「逸脱」という幻想を再生産することで生み出されてきたのか、そしてどのように「正常」が刷新され書きされ、ゆえに歪められてきたのかを、西洋文化——それは文学、映画、リアリティ番組、広告、音楽、ミュージック・ビデオなどを含む、広義の視覚文化である——におけるテキストの分析を通じて、例証する。そしてそれを通じて、「正常」な身体や「正常」な見方こそが、最も「歪められ」たものであることを、明らかにする。

第一章「ボディ・イメージの歪みの精神分析——『鏡の中の少女』における拒食症のドラマと象徴的なものの矛盾——」では、心理療法士のスティーヴン・レヴェンクロン (Steven Levenkron) によるヤングアダルト小説、『鏡の中の少女 (*The Best Little Girl in the World*)』(一九七八)を取り上げる。主人公フランチェスカ (ケサ) は、女性美と結びつけられた痩せという「正常」な身体、すなわち〈他者〉の眼差しの具現化を、「なることを通して手に入れる」欲望の対象として追い求める。フランチェスカの執拗な痩せの追及は、彼女の身体を羸瘦状態へ近づけてしまう。これは、欲望は絶え間ない成就の遅延によってその本質が死の欲動であることが暴かれるという、欲望

する主体の当然の帰結である。一方で物語に登場する心療内科医のシャーマンは、〈父の名〉としてフランチェスカを病理化し、「知っている」と想定された主体」という〈他者〉としての役割を担うことで、彼女にその欲望を断念させる。本章では『鏡の中の少女』を、〈他者〉の要求に従ってダイエットをはじめた結果、〈他者〉はいないのだという〈現実〉に近づきすぎた少女を、〈他者〉が病理化することでその欲望を断念させるという、象徴的秩序の矛盾を顕在化させるテキストとして位置づける。

第二章「プラスチックな鏡像段階——『ボッチド』における美容整形の表象と「寸断された身体」——」では、美容整形が、個々人の「正常」な身体への不可能な同一化を、まるで可能なものであるかのように見せかけるものとして機能している点を、美容整形を題材としたアメリカのリアリティ番組である『ボッチド (Botched)』(二〇一四—二〇二〇)の分析を通じて明らかにする。主体は美の基準という象徴的秩序である〈他者〉の眼差しによって、「〈わたし〉は醜い」という幻想を与えられるのだが、美容整形の過程においては「醜い」とされる身体の部位が、視覚技術によるイメージ上でばらばらに寸断される。審美的に「正常」でなく、ゆえに寸断された身体を「矯正」するために美容整形を受ける主体は、手術を経て、手術前とは異なるボディ・イメージへの(再)同一化を果たすこととなる。わたしはこれを、ラカンの鏡像段階に比類するもの、わたしが「プラスチックな鏡像段階」と名づけるものとして解釈し、『ボッチド』で描かれる美容整形が手術を通して主体に「正常」な身体への(再)同一化を経験させるものとして機能していること、そしてそこでは、美の基準という〈他者〉の根源的欠如が覆い隠されていくことを明らかにする。ここではまた、フーコーの理論に偏る傾向があった既存の美容整形研究に、ラカン派精神分析理論の視点を導入していく。

美容整形が「正常」な身体をまるで入手／到達可能なものとして見せかけている一方で、美容整形を執拗に繰り返す、いわゆる「整形中毒者」たちは、身体醜形恐怖症の発症者として病理化され、周縁化される。第三章「美容整形と「正常」な身体の枠組み——『エクストリーム・メイクオーバー』、『ザ・スワン』、『ボッチド』——」では、まず美容整形の歴史を概観し、医学の一分野としての美容整形が、「正常」な身体を手に入れる手段として成長してきたことを明らかにする。次にアメリカで放映され人気を博し、一方で物議を醸したリアリティ番組、『エクストリーム・メイクオーバー (Extreme Makeover)』(二〇〇二—二〇〇七)と『ザ・スワン (The Swan)』(二〇〇四)を取り上げ、そこで美容整形がどのように描かれてきたのか、そしてどのような批判が浴びせられてきたのかを確認する。美容整形やそれを肯定的に描くメディアに浴びせられてきた批判には、美容整形がまるで身体を無限に改変可能なものであるかのように見せかけ、身体の物質性を蔑ろにし、手術のリスクを後景化することに貢献しているというものがある。『ボッチド』はそうした批判に対する予防線として、美容整形を繰り返し、ボディ・イメージの歪みを抱える人物を登場させながら、彼らを「逸脱」として病理化し、医師らに手術を拒否させる。しかし「正常」な美容整形と「逸脱」した美容整形という二項対立を作り出すこと自体が、「正常」な美容整形ならば「正常」な身体を「なることを通して手に入れる」ことができる、という従来の美容整形観を、払拭するどころか保持し、強化さえすることに繋がるのだ。本章ではこのことを、テキスト分析を通じて明らかにする。

第四章「なぜマッチョな摂食障害は見えないのか——ボディ・イメージへの執着と男らしさ——」は、男性の理想的身体像として普及している、筋骨隆々な「超男性的」身体に潜む病理に着目する。ボディビルダーらのような巨大に鍛え上げられた身体を「男らしさ」の最たるものとして理想化する契機となったのは、アーノルド・シュワルツェネッガー (Arnold Schwarzenegger) 主演のドキュドrama、『パンピング・アイアン (*Pumping Iron*)』(一九七七) であると言われる。そこでは肉体改造に没頭し、外見にばかり気を配る男たちの姿が、女性蔑視と同性愛嫌悪とともに描かれ、徹頭徹尾ホモソーシャルで「超男性的」なものとして提示される。一方『パンピング・アイアン』からは、ボディビルダーらの偏執的な摂食行動やステロイドの使用に関するシーンが削除されていたことが、二〇〇三年に発売された同作の二五周年記念版DVDに収録された特典映像から、明らかになった。すなわち「超男性的 (supermale)」身体は、身体と精神に悪影響を与えかねない、筋肉醜形恐怖症に通ずる行動によってのみ獲得されるものだということが、知らされたのだ。しかし『パンピング・アイアン』の精神的続編として位置づけられる『ジェネレーション・アイアン (*Generation Iron*)』(二〇一三) では、ボディビルダーらの執着するボディ・イメージ、摂食行動、ステロイドの使用に潜む危険性が、徹底的に「男らしさ」と結びつけられ、後景化される。筋肉質な身体に重ねられる「男らしさ」のイメージこそが、その身体を獲得に伴う身体的／精神的な不健康さを、覆い隠すのである。第四章では、ボディ・イメージに起因する男性の拒食症を描いた数少ないテキストのひとつとして、ルイ・メッツガー (Lois Metzger) によるヤングアダルト小説、『ア・トリック・オブ・ザ・ライト (*A Trick of the Light*)』(二〇一三) も取り上げる。ここではテキストの読解を通じて、主人公であるマイクの摂食障害が、「男性は細さを追求しないはずだ」、「摂食障害は女性の病である」というふたつのステレオタイプによって、「正常」でないものとして周縁化されていることを明らかにする。

第五章「スキニーな身体を読み直す——西洋視覚文化における痩せに対する受容の変化——」では、女性美と結びつけられる痩せた身体、すなわち「正常」な身体が個々人に及ぼす悪影響についての議論が活発になるにつれて、痩せ細った女性が拒食症的で「スキニーな身体」として病理化されてきたこと、また痩せた女性が「^{痩せているバカな女}スキニービッチ」と呼ばれ嘲笑されるようになったことを確認する。痩せた身体は、一九二〇年代および一九六〇年代に、既存のジェンダー観から解き放たれた新しい女性像として、理想化されてきた。しかしそこには、女性の価値を外見だけに集中させ、過剰な食事制限とダイエットを強いることで彼女らを抑圧する圧力が存在していた。八〇年代後半のフェミニストらがこのことを指摘し続けた結果、九〇年代になると痩せた身体を女性美と結びつけるメディアに対する批判が増殖していった。すると今度は、痩せた女性を拒食症のイメージと重ね合わせ、「おぞましきもの」として描き出すメディアが増え始めた。また二〇〇〇年代に入ると、あらゆる規範性を疑問に付す第三波フェミニズムのメッセージと共鳴する形で、痩せた女性を、外見にしか気を配らない、白人で、中流階級で、異性愛者で、シスジェンダーの「^{痩せているバカな女}スキニービッチ」として攻撃する価値観が出現した。一見すると痩せていることを理想化する価値観を再考しているように見えるこうした動きの背後では、身体を痩せすぎても太りすぎてもいない体型に、「適切」に管理しろというプレッシャーが、根強く保持されている。また同時に、痩せを特権と結びつける言説

の内部では、痩せていることを女性に強いる文化的な圧力や、個々人が経験する摂食障害やスキニー・シェイミングの耐え難さが、後景化されてしまう。「正常」な身体は、社会文化の変遷とともに刷新され、更新され、歪められてきたのだが、それに対する批判自体がしばしば「正常」とされる身体の人々への批判にすり替わることで脱政治化され、「正常」な身体が個々人の身体と精神に及ぼす悪影響という論点が見え難くなってしまふ。本章ではこのことを、広告、オンライン記事、リアリティ番組、音楽、ミュージック・ビデオ、テレビ番組など多岐にわたるテキストの読解を通じて、明らかにする。

ボディ・イメージの歪みを抱える人々が自分自身のボディ・イメージを「歪んで」捉えることは、つねにすでに歪められ、そもそも存在しえない「正常」という、〈他者〉の眼差しとその具現化を通してのみ可能になる。〈わたし〉にとっての〈わたし〉と〈他者〉にとっての〈わたし〉が一致しない以上、「正常」な身体への同一化は、つまり〈他者〉の眼差しとの一体化は、失敗する運命にある。しかしそれでも、その眼差し抜きに、〈わたし〉は〈わたし〉になることができないため、〈わたし〉は〈他者〉の眼差しを具現化せざるをえない。「正常」な身体は、まさにこの不可能性において、主体の欲望を強く喚起するのだ。「正常」な身体は、個々人の身体に対する不満を煽ることを通じて、ダイエットやトレーニング、美容整形を普及させてきた。しかし、このような手法を通じて「正常」を追求し続ける人々は、結果としてボディ・イメージの歪みを伴う摂食障害や醜形恐怖症に苦しみ、病的で「逸脱」した人物として棄却されてしまう。「正常」の追求が「逸脱」を導くというこの矛盾した境遇は、明らかに「正常」な身体そのものが、身体や精神に悪影響を与えることなしに到達できないほどに、「歪められた」ものであることを示している。逆に言えば、「正常」とは、その持続的な探求によって、それ自体が虚構であることを暴かれるようなものなのだ。本論の目的は、この〈「正常」な身体のゲシュタルト崩壊〉を方法論的に援用し、「正常」と「逸脱」の二項対立を描き出す西洋視覚文化におけるテキストを持続的に注視することで、「正常」のゲシュタルトを崩壊させることである。それによって明らかになること、それは、「正常」が根本的な不可能性に根差していること、そしてそのような身体やものの見方こそが、最も「歪められ」た、「正常」とは程遠いものであるということである。